

成城大学での五年半

後藤 昭雄

ご紹介いただきましたように、私は来年三月に定年により退職することになっております。今日の私の話は、半年ほど早いのですが、これを記念する講演として行うものです。したがってそれにふさわしいものでなければなりません。とともに成城国文学会という研究発表の場に適うものでもなければなりません。それで、迷いましたが、成城大学に在職した五年半の自分自身の仕事を振り返ってみようと思えます。このようなことは、一人よがりになる、また自慢話に墮してしまいかねませんが、そうならないよう心懸け、できるだけ客観的に見るように努めて、自分の研究の歩みのなかではどのような意味を持つものであったか、または多少なりとも研究史に関わるところがあったとしたら、どのように位置づけられるかというようなことを考えてみたいと思います。しかし何にしても自分を語ることで気恥しいのですが、しばらくお付き合いをお願い致します。

資料の初めにあげたのは成城大学に勤務した二〇〇七年四月から現在（二〇一二年十月）までの著書、論文を
年毎にまとめたものです。

二〇〇七年

『金剛寺本『三宝感応要略録』の研究』（監修、勉誠出版）

「愁鬢詞」本文校定―活字本の危うさ（『語文研究』第一〇三号）

嵯峨天皇と惟良春道（『国語と国文学』第八四卷九号）

早稲田大学図書館蔵『小野僧正祈雨之間賀雨贈答詩』をめぐって（『成城文藝』第二〇一号）

二〇〇八年

坤元録屏風詩をめぐって（『成城国文学』第二四号）

嵯峨朝の文人の位階・官職と文学（日向一雅編『王朝文学と官職・位階』竹林舎）

嵯峨朝の宮廷文学と東アジア（仁平道明編『王朝文学と東アジアの宮廷文学』竹林舎）

仁明朝の宮廷文学と東アジア（仁平道明編『王朝文学と東アジアの宮廷文学』竹林舎）

『天台伝南岳心要』（吉原浩人・王勇編『海を渡る天台文化』勉誠出版）

〔解題〕『文選』卷二（冷泉家時雨亭叢書『大鏡 文選 源氏和歌集拾遺二』朝日新聞社）

二〇〇九年

『本朝文粹抄』二（勉誠出版）

『太公家教注解』（共著、汲古書院）

『全経大意』について（科学研究費研究成果報告書「真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査研究—金剛寺本を中心に」
成城大学）

日本の古代の文献と中国口語（『成城國文學論集』第三二輯）

平安朝における『文選』の受容—中期を中心に（『文学』隔月刊第一〇卷三号）

白河尚齒会記考（『平安文学史論考』武蔵野書院）

〔座談会〕日本漢詩のエートス（『文学』隔月刊第一〇卷三号）

二〇一〇年

『和漢兼作集』下巻の基礎的考察（『成城国文学』第二六号）

『全経大意』と藤原頼長の学問（『成城國文學論集』第三三輯）

表白についての序章（『佛教文学』第三四号）

平安朝詩拾佚—彰考館文庫蔵『詩集』から（『和漢比較文学』第四五号）

踏歌章曲考（仁平道明編『源氏物語と東アジア』新典社）

二〇一一年

〔ラジオテキスト〕『漢詩を読む 日本の漢詩（飛鳥〜平安）』（NHK出版）

源順の詩序一首―『文選』受容の一例（『成城國文學論集』第三四輯）

平安朝漢文學史の輪郭―詩序を例として（『國文學解釈と鑑賞』第七六卷八号）

二〇一二年

『平安朝漢文學史論考』（勉誠出版）

延久三年「勸学会記」本文再考（『成城國文學』第二八号）

平安朝漢文學研究の軌跡―学会発足以後（『和漢比較文學』第四八号）

この中から選んで、四つのことについてお話したいと思います。

最初に二〇〇七年の『小野僧正祈雨之間賀雨贈答詩』、二〇一〇年の『詩集』、それと論文にはしておりませんが、お茶の水図書館所蔵の『善華抄』^{せいかしやう}について申し上げます。

『小野僧正祈雨之間賀雨贈答詩』は一般には『小野僧正請雨行法賀雨詩』（続群書類従、文筆部）として知られているものです。長元六年（一〇三二）五月、日照りが続くので、仁海（小野僧正）が雨乞いの行法を行ったところ、効果があつて雨が降った。そのことを喜んで、上流貴族、文人、高僧たちが詠んだ漢詩を詩巻にしたものです。この資料は一九九九年に早稲田大学で和漢比較文學会の大会が行われた折の善本展に展示されて、私は存

在を知りましたが、早稲田大学の関係者によって調査が行われるだろうと思っておりませんでした。しかしそのままになってしまったので、成城大学に勤めるようになって見に行きました。調べてみると、この書は次のような内容でした。

(1) 「菅家長韻詩末句」

(2) 「元慶僧正於醍醐山詠二十三首序」

(3) 「賀雨贈答詩」

(4) 菅原輔正と元泉との贈答詩

(5) 定賢の寛治三年（一〇八九）の祈雨の記録

「賀雨贈答詩」だけでなく、他に四つの資料が含まれています。(5)は歴史史料ですから除外して、他は断片的なものながら、平安朝の漢詩文資料です。(1)と(4)は新出の資料でした。そこで私はこの詩巻を紹介する論文を書きました。

次に彰考館文庫蔵の『詩集』ですが、これは膨大な量の日本漢詩の集成です。有名な水戸の徳川光圀が『大日本史』編纂に付随する資料収集の一つとして、彰考館の史臣たちに命じて成した事業です。もともと『文集』と一具をなして《本朝詩文集》となるべきものとして計画され、貞享三年（一六八六）『文集』と共に光圀に献上されました。四十巻、彰考館文庫に現存しています。『文集』の方は増補を加え、『本朝文集』として新訂増補国史大系の一冊として公刊されていますので、簡単に見ることができますが、『詩集』は未刊のままです。『本朝文集』の「解題」⁽¹⁾に『詩集』についても説明がありますが、それによると、奈良時代から江戸時代に至る、およそ七五

○人、七一六五首もの詩が集められているとあります。私はこの「解題」によって『詩集』の存在を知り、以前から見たいものだと思っておりました。しかし、彰考館の本は見る事がむずかしいとも聞いていたのであきらめていたのですが、成城大学に赴任してしばらく経った頃、大阪大学の出身で日本漢文学の研究をしている仁木夏実さんが『詩集』を見ることができるということを教えてくれました。そこで早速に調査させてほしいとお願ひし、『詩集』全体のこととは仁木さんにまかせることとして、私は以前から関心を持っている散佚詩の収集という点に限って調査し、『詩集』に残されている平安朝の佚詩について論文を書きました。

以上の二つは平安朝漢詩文に関する新しい資料を調査した結果の報告ですが、私にとつては、以前に編んだ『日本詩紀拾遺』に連なる作業です。江戸時代には、この『詩集』のような、我が国で作られた漢詩を集成する仕事が何度か行われていますが、その一つに『日本詩紀』があります。これは市河寛齋が我が国で漢詩の詠作が始まった近江朝から平安朝末までに作られた漢詩をすべて集めようとした詩集で、日本古代の漢詩、詩人を研究するうえではなほ大宝なものなのですが、漏れた詩も多少あり、何よりもこの書が編纂された天明六年（一七八六）から現在まで二百数十年もの時間の経過があり、多くの漢詩資料が出現し、また公にされています。そこで、私はこれらの漢詩を拾い集めて『日本詩紀拾遺』（吉川弘文館、二〇〇〇年）を編集したのですが、それ以後も『日本詩紀拾遺』の拾遺ということを中心にしています。二編の論文はこうした関心に基づくものでもあります。

もう一つ、『菁華抄』という本についてお話ししたいと思います。現在はお茶の水図書館の所蔵ですが、かつては有名な国文学者であり歌人であった佐佐木信綱の蔵書でした。現存するのはこのお茶の水図書館蔵本だけです。すなわち天下の一本ですが、それも巻三のみです。

この書は、分かりやすくいえば、漢詩文を作るための参考書です。この巻三は宝貨部、儀飾部、飲食部、章服部、音楽部、文学部、武器部、伎芸部から成っています。そして宝貨部は金、珠、玉、錦、繡、糸、香の項目に分けられ、金の項には、

麗水、華山、楚、揚州、……季布一諾、捐金、潤屋、地台、……

といった語彙が列挙されています。分類された詩語集です。ですから、作り手からすれば、このような書物を手許に置いて、自分が必要とする言葉を捜し出して詩や文章を綴っていくということになります。平安朝末から鎌倉時代にかけて、『文鳳抄』や『幼学指南抄』などの類似した書物が編纂されています。

この『菁華抄』については学会で口頭発表をした⁽²⁾だけですが、新しい資料の調査紹介ということで先の二つと同じであり、それで一緒に取り上げましたが、それともう一つ、自ら考えてみますに、これらは成城大学に勤務したからこそ、した仕事だと思えます。早稲田大学、お茶の水図書館そして彰考館文庫の資料です。彰考館といっても水戸まで出かけたのではなく、等々力^{とどろき}(世田谷区)にある水府明德会の東京レファレンスルームで見せてもらいました。大学から小一時間で行ける距離です。ただ、この『詩集』は私にとつての重要度から言って、もし関西にいたとしても東京へ調査に出かけて来ただろうと思えますが、他はわざわざ出てくることは多分なかったらうと思えます。その気力は出なかつたでしょう。そういう意味で成城大学にいたから書いた論文でした。

次に取り上げたいのは「延久三年「勸学会記」本文再考」(二〇一二年)です。

初めに勸学会^{かんがくえ}について説明しなければなりません。これは平安時代の中頃、九六四年に創始された仏教行事です。毎年三月と九月の十五日、大学寮で歴史・文学を学んでいる学生^{がくしやう}と比叡山で修行中の天台宗の僧侶それ

それ二十人が、比叡山の京都側の麓にある寺で一同に会し、『法華経』の教義を学び、念仏を唱え、そして『法華経』中の偈けを題として仏教詩を作るといふ、仏教と文学とを共に学ぶ場でしたが、そこではその行事の様子を記録する「記」も書かれました。もちろん漢文です。毎回書かれたはずですが、現存するのは二篇だけです。その一つが、会が始まって百年余り経った延久三年（一〇七二）の「勸学会記」で、『朝野群載』に収載されています。

私は勸学会が時代の推移の中でどのように変質していったかを明らかにするために、この延久三年の「勸学会記」を資料として用いて「延久三年「勸学会之記」をめぐって」という論文(3)を書きましたが、その時は『朝野群載』は活字本として標準的なテキストである国史大系本を使っていました。

成城大学に赴任してすぐのことですが、学会の席で、慶応大学の佐藤道生さんから、私が東京にいるようになったのだから、一緒に何か読みましょうという誘いがありました。また早稲田大学の河野かうの貴美子さんからも勉強会をという話がありました。そこで、他に若い人たちも加わって五、六人で、成城大学で『朝野群載』の輪読会を始めました。『朝野群載』を選んだのはまだ丁寧な読解がなされていない作品が多く残されていることと、平安後期の作品が比較的多く、この時期を最も専門とされる佐藤さんと一緒に読んでみようという思いからでした。テキストには佐藤さんがお持ちの二つの写本と私が持っていた大阪大学附属図書館蔵の写本を校合して校本を作って読んでいましたが、間もなく高田義人さんが参加されるようになりました。高田さんは宮内庁書陵部にお勤めで日本史がご専門ですが、先に『朝野群載』諸本の伝流、系統についての研究(4)をなさった方です。そうした方が参加されるようになって、多くの写本を用いて校定本文を作成し、それに基づいて作品を読むことができる

よくなりました。そうすると、国史大系本の本文には問題が少なくない、不安であるということが分かってきました。そこで、私は以前に読んだ「勸学会記」についても再検討する必要があることを感じ、お二人にお願いして改めて諸写本による校定本を作り、それによって作品の読み直しをしたのがこの論文です。

以上のようなことですので、この論文は間違いなく成城大学で『朝野群載』の輪読会をするようになったからこそ書くことのできた論文でした。なお、写本によって国史大系本の本文を正すべき例は他の作品にもあり、良質の写本を用いて信頼できるテキストを作ることの必要性を感じています。

次は二〇〇九年の「日本の古代の文献と中国口語」です。

「口語」（俗語）とも称される）は本来話し言葉であったものが文章語で書かれる漢詩漢文に取り入れられた語彙を言います。この論文の一部を引用してみます。

前節で「三五」の用例が見えるものとして引いた『続本朝往生伝』の寛印伝には、また「此間」という語が用いられているが、この語もまた口語である。この語について考えてみたい。

まず、はっきりとさせておかなければならないことはこの語の訓みである。例えば『続本朝往生伝』の日本思想大系本は「この間」と訓読するが、誤りである。そのことは、この語についての専論である、池田証寿「カシコ（彼間）」と「ココ（此間）」——因明大疏抄に見える肝心記の佚文——（『国語学』第一五五集、一九八八年）が論の出発点として挙げる「肝心記」の佚文に明確に示されている。

案云、彼間者俗語也倭言加之去。此間者俗語倭言去。

「此間」が俗語（本稿でいう口語）として用いられた時の意味を日本語で言えば「挙去（ここ）」である、ということになる。「此間」に俗語（口語）としての用法があることと、その訓みを明記した、まことに貴重な資料である。なお『類聚名義抄』にも「此間」、「とある。

訓みを確定してもう一度、寛印伝の文章に戻る。

三五は彼の朝の語にして、此間に一兩と称ふが如し。

この一文は「此間」という語が、「彼朝」、宋（中国）に対して、日本を指す語であることをよく示す例である。

ここでは「此間」という語を例にしていますが、口語には口語独特の語彙もあり、またこの語のように同一の語が文章語と口語では意味が異なるものもあります。漢詩文を正確に読むためには、このような口語についての知識も必要です。

この論文では、『続日本紀』、空海の詩、そして『古今集』撰者の一人である凡河内躬恒おほしろうのみのつねの漢詩に用いられている語句を取り上げて、これまで見過ごされてきた口語としての用法として理解すべきことを述べました。

私がこのような言葉に関する論文を書いたのは、これが本学で国語学を担当されていた工藤力男先生の退職をお祝いする『成城國文學論集』の記念号のために執筆したのだからでした。せめて自分の能力の範囲において少しでも記念号にふさわしい内容のものをと考えて、このような論文を書きました。ですから、これもまたこのような意味において、成城大学に勤めたことで書いた論文です。

私は以前にも漢文を正しく読むためにという意図から、平安朝詩や『続日本紀』、律令等の歴史史料を対象として、そこに用いられた口語を調査して論文を書いています。また初めにあげた中の二〇〇七年の『金剛寺本』『三宝感応要略録』の研究』は、私の大阪大学退職に当たって祝って下さる卒業生有志の諸氏と一緒にした仕事ですが、この本においても訓読文を作るに当たっては、『三宝感応要略録』に用いられている口語を正しく読むように心がけました。この論文はこうした仕事に連なるものとなります。

最後になりますが、二冊の本についてお話し致します。

一冊は本といっても学術書ではなく、ラジオ放送のテキストです。NHKで続いている教養番組「カルチャーラジオ」の一つ、「漢詩を読む」のテキストとして書いたものです。

二〇一〇年の六月だったと思いますが、NHKエデュケーションという所から、突然（手紙や電話ではなく）大学宛のファックスが送られてきました。次には担当のプロデューサーと会って具体的な話をしましたが、長い間、「漢詩を読む」というテーマで番組を続けているが、今回、日本の漢詩を取り上げたいので、講師を引き受けてほしいということでした。

私はいかねてから日本人の書いた漢字の文学の存在をなるべく多くの人々に知ってもらいたいと思っていました。次にお話する『本朝文粹抄』の執筆もその一環なのですが、そういう思いを懐いていましたので、NHKラジオという日本を代表するマスメディアを通して日本人の漢詩を一般の人に紹介することができるのであれば、これは絶好の機会だと思って引き受けることにしました。

古代から近代までという話でしたが、私が責任を持って話ができるのは平安朝の終わりまでということで、半

年間、担当することになりました。そのために書いたのが、この『漢詩を読む 日本の漢詩（飛鳥〜平安）』です。二四回の放送でしたが、『懐風藻』に集められている飛鳥・奈良時代の詩から始めて、平安末期の藤原忠通ただみちまで、時代を追って、主に作者を中心にまとめて、一回に三、四首の詩を読むこととしてテキストを作りました。

放送は第二放送の土曜日の夜（月曜日午前中に再放送）の三〇分ということでしたが、テキストができ上がるとすぐに録音が始まりました。毎週、金曜日の講義が終わってから、渋谷の放送センターに出かけて、一回に二週分を録音しました。私にとってはもちろん初めてのことで大変でしたけれども、得がたい経験でした。初め苦勞したのは時間の調節でした。ディレクター（若い女性でしたが）に二九分三〇秒でお願いしますと言われても、そう簡単にはいきません。

他にもお話したいことはありますが省略して、一つ申し上げておきたいことがあります。それは漢詩の朗読を加賀美幸子さんが担当して下さったということです。加賀美さんのお名前は皆さんご存知だと思います。すでに退職して今はフリーでご活躍ですが、在職中はNHKの女性アナウンサーの代表的存在でいらっしました。その加賀美さんが朗読を下されたことはこの放送に重みを加えましたし、私にとっても本当にうれしかったです。ところが残念なことに、テキストにはどこにも加賀美さんのお名前は出てきません。それで最後の録音の日に、私は「一つお願いがあります。テキストに加賀美さんのお名前が書かれていないことを私は残念に思っています。記念にこれに署名をしていただけませんか」とお願いしました。加賀美さんは心よく応じて下さり、テキストの扉の「講師 後藤昭雄」の横に、麗筆で「朗読 加賀美幸子」と署名して下さいました。私の宝物になりました。なお、この放送は昨年（二〇一一年）の四月から九月まで行われました。

次に先程ちょっと触れた『本朝文粹抄二』についてお話しします。この本は私にとつては今の『漢詩を読む日本の漢詩』と同じ意味を持っています。これは「二」ですので「一」があります。当初は「二」を出すことは予想していませんでしたので、ただの『本朝文粹抄』ですが、二〇〇六年に出ました。その本の「はじめに」で私は次のように述べました。

これまで機会あるごとに述べてきたことであるが、わが国の文学史は、古代から近代初期に至るまで、途切れることなく、漢字で書かれた文学を有している。すなわち漢詩漢文である。日本人が作り、また読んだのは、仮名（漢字仮名交じり）で書かれた作品だけではないのである。平安時代に即していえば、『源氏物語』に代表される物語や和歌ばかりではなかった。

本書はそのことをなるべく多くの人に知ってもらうことを目的としている。

平安朝の漢詩文を一般向けに紹介したものは、はなはだ少ない。それでも、漢詩については、小島憲之『王朝漢詩選』（岩波文庫、一九八七年）、新編日本古典文学全集『日本漢詩集』（菅野禮行校注訳、小学館、二〇〇二年）、興膳宏『古代漢詩選』（日本漢詩人選集、研文出版、二〇〇五年）などがある。しかし漢文については、このようなものがない。岩波書店の新旧両方の日本古典文学大系に『本朝文粹』があるが、簡単な注が付されているだけで（あとの「本朝文粹概説」参照）、これでは、なかなかなじみにくいだろう。

このような現在の事情を考えて、幸いに勉強出版の雑誌『アジア遊学』に連載執筆の機会を与えられたので、平安時代の漢文を紹介することとして、その四一号（二〇〇二年七月）から五五号（二〇〇三年九月）に、

「本朝文粹抄」と題して十二回に亙って小文を草した。

話しが前後しますが、『本朝文粹』というのは十一世紀の中頃に編纂された漢詩文集です。平安朝初期（九世紀初）から十一世紀前半まで約二百年間に作られた四三二首の作品を集めています。詩文集ですが、書名どおり漢文が主になっています。

『本朝文粹抄』はこの連載を一冊の本にしたものですが、「二」はその続篇で、一四首の漢文を収めました。原文、書き下し文をあげ、必要な語句には注釈をほどこし、口語訳を付け、その作品が提出する問題について解説する、このような内容です。平安朝の漢文の世界を専門以外の人々に知ってほしいという思いから出したものです。

またラジオテキストのことに戻りますが、この本もまた私が成城大学に勤めていなかったなら、書くことは（ラジオ放送することは）なかっただろうと思います。なぜかは、雑談になってしまっていますが、こういうことがあります。

先程紹介して下さいましたが、私は熊本市に生まれ、高校までを熊本で過ごしました。中学も市内の公立中学でしたが、その中学時代の友達で東京や近県に住んでいるのがいて、大阪大学に勤めている頃から、私が東京へ出る機会に合わせて、数年に一度ですが、一緒に集まるということをしていました。それが私が東京に住むようになったというので、赴任して間もなくのことだったと思います。東京駅近くのレストランでミニクラス会をしました。会がお開きになって、その中の一人（女性ですが）と帰る方向が同じということで中央線の電

車に乗りました。その時、彼女から「後藤さんはどういうことを研究しているの」と聞かれたので、これこれこういうことをしていると答えました。そして「あなたのご主人はどんな仕事」と尋ねると、「主人はNHKのプロデューサーで教養番組を担当しています」という答えでした。その時はそれで終わりでした。それから二年程経って、先にお話したファックスが届きました。そのプロデューサー（Tさん）と毎週顔を合わせるようになってからも、正面切って尋ねたことはありませんが、おそらく先のTさんの奥さんと私との会話が、この放送の端緒になっただろうと思っています。ですから、その時、彼女とこのような話をするのがなかったら、それは遡っては、私が成城大学に勤めることがなかったら、ラジオ放送をすることも、またテキストを執筆することもなかったはずです。

最後は雑談に堕してしまい、また初めに申し上げた意図とは随分と逸れてしまつて、成城大学は私にとつてどのようなものであつたのか、というようになつてしまつたが、以上で終わりに致します。

注

- (1) 飯田瑞穂「本朝文集」（『国史大系書目解題』上巻、吉川弘文館、一九八一年）。
- (2) 「菁華抄」について（和漢比較文学学会第九八回例会、二〇一一年十二月五日、奈良大学）。
- (3) 大谷大学文藝学会会誌『文藝論叢』第五六号、二〇〇一年（『平安朝漢文学史論考』勉誠出版、二〇一二年に収録）。
- (4) 「朝野群載」写本系統についての試論 慶長写本・東山御文庫本・三条西本・葉室本を中心として」（『書陵部紀要』第五四号、二〇〇三年）。

(5) 「平安朝詩文の「俗語」」(『語文』第四八輯、一九八七年)、「律令の中の中国口語」(『続日本紀研究』第二六四号、一九八九年)、「『続日本紀』における中国口語」(『続日本紀研究』第三〇〇号、一九九六年)。

(付記)

二〇一二年十月二十日の成城国文学会において同題で行った講演を原稿化したものである。その場では時間の都合で割愛したことを多少付け加え、注を付した。